

2022年も就学支援事業の充実を目指します

2021年も、新型コロナウイルスの感染拡大により、支援している学生の多くが学校生活や進路に大きな影響を受けました。その中で、4月に社会人となった元支援生が卒業までを振り返ってお話を聞かせてくれました。

あさと

安里 ルイスさん（東京農工大学大学院 生物システム応用科学府修了）

ルーツはペルー。2015年度から生活支援生（2017・2018年度「坪井基金」受給）



―入社1年目、毎日お忙しいですか？

（安里）味の素ファインテクノ社で、パソコンや携帯などのモノづくりに必要な化学材料を開発しています。味の素は「食品メーカー」と思われる方も多いですが、香粧品、医薬品、電子材料なども研究しています。私自身は種々の材料を探索、配合し、優れた物性の材料とその使い方を顧客に提案しています。次世代の技術を創り、新素材を世界に届けられるのが醍醐味です。

―大学院では、どんな研究をされていたか？支援生報告会では環境保護をテーマに発表して頂きましたね。

（安里）カシューナッツの殻（廃棄物）に含まれる特殊なオイルを原料にして、環境に優しく、包装材や接着剤にも使えるバイオマスプラスチックを合成する研究をしていました。多くの化学メーカーで、石油原料の代替や、環境負荷の少ない材料の開発が進められている一方で、SDGsにある「つくる責任、つかう責任」について考える必要もあります。一見、作る責任が重要視されがちですが、せっかく環境に優しい材料が開発されても、リサイクル等されずに大量廃棄されたら意味がありません。環境に優しい材料＋消費者による環境に優しい使い方、両輪が揃ってこそ環境保護に効果が出ると考えています。

―安里さんのルーツはペルーですね。

（安里）1990年代に両親が出稼ぎ労働者として来日し、その後私が生まれました。日系定住者の二世という括りをよくされます。出稼ぎにきた日系定住者の家庭は、日本語能力が低い場合や、経済的に苦しい場合が多く、子供たちが勉強についていけなかったり、高校や大学の学費を用意できず、親世

代同様に、非熟練労働者しか進路として選べない問題があります。両親は逆境の中でも、私の将来の夢：「進学して新素材を開発し世界に届けること」を応援してくれていましたが、リーマンショックの際に職を失ってしまい、日本での進学を諦める事態も経験しました。中学生だった当時は毎晩悲しみに暮れたことを思い出します。帰国の準備をする中、突如、父の勤める工場が再開したニュースが入り、何とか進学の望みを繋げることができました。その後は一層学業に専念し、節約で絞りだした塾代や奨学金などに助けられて、大学院まで進むことができました。

大学に合格した時に、日系定住者の知り合いから「ありがとう」と言われることがありました。理由は、経済的に苦しい中でも進学した日系定住者というロールモデルになってくれたからだと言われました。その時、私のような存在が、中高生の学習サポートや、進路のアドバイスをすることによって次世代の選択肢を広げられるに違いないと気づき、大学時代にさぽうと21の学習支援室で活動することにもつながりました。

―理数科目や受験対策などを教えて頂き感謝しています。今後目指していることは？

（安里）学習支援室では、様々な国の出身の生徒たちと対話できました。私は、外国にルーツをもつ全ての子供たちに、日本と母国、そして第三の国々との架け橋になってほしいと願っています。そうすれば、ネットワークが無限に広がっていく、SDGsなどの世界的な課題解決にもつながると信じています。

2022年度生活支援プログラム 支援生募集中

日本に定住し、大学や専門学校に通うことが経済的に困難な難民または、日系定住者・中国帰国者の子などの主に「定住」「永住」の在留資格をもつ方（既に日本国籍になった方も含む）の就学を支援するプログラムです。

支援対象 日本の大学、専門学校に在籍中または、2022年4月に入学予定の方

募集期間 2021年12月1日（水）～2022年1月28日（金）必着

詳細はホームページをご覧ください。 <https://support21.or.jp>

坪井一郎・仁子学生支援プログラム(坪井基金)

2022年2月27日(日)オンライン報告会を開催します

昨年度のテーマは「SDGs 達成のために自分たちができること」。今年は支援生全員が企画に加わり話し合う中で、「進路を考えている外国出身の高校生に、自分たちの背中を見せたい」という共通の想いが育まりました。経済的な理由や家族の事情で進学を断念してしまう同世代の外国出身者を身近に知っている支援生だからこそ、生まれたテーマです。

難民などの外国出身の大学生・大学院生が語る「今までの自分、これからの自分」を、外国にルーツをもつ高校生などに聞いて頂き、進路選択について話し合う機会になれば幸いです。

1月中旬から HP で参加申込みを受け付ける予定です。どなたでもご参加可能ですので、ぜひお問合せください。

今年度の報告会に登場する支援生2人を紹介します。

アリザ メグミさん

東京大学大学院医学系研究科 修士課程1年

ルーツ：インドネシア

私は高校時代の研究や野外調査を機に理系研究に興味を持ちました。卒業後アラビア語を学んでいた時に乾燥地に興味を持ち、乾燥地問題に取り組む研究センターがある鳥取大学農学部に進学しました。所属した研究室は、乾燥地を起源とする植物が悪循環に耐え、有用物質を作出する仕組みを分子レベルで調べ、新しい応用技術を開発することを目指しており、私はコムギの高温ストレス耐性機構解明に取り組みました。そこで高温ストレスの影響を調べるために細胞膜（生物の細胞と外界との仕切り）に注目し、細胞膜を舞台とした分子細胞生物学をより深く研究したく大学院に進みました。



幼い頃私は父が工場で働いている事が恥ずかしかったのですが、今はトップの技術を持ち信頼される父をととても誇りに思います。曾祖父は北海道出身で、第2次世界大戦中、インドネシア(尼)の日本軍に日系1世として参加し、尼人女性と結婚しました。彼は薬剤師として日本軍負傷者の手当に奮闘し、戦後は薬局をつくり人々の健康を見守っていました。現地に残り家族を築き上げた心情はどうだったのか、父によると、曾祖父は多くは語らなかったそうです。

大戦や移住など、私達が今日経験したことのない先祖の苦労や多くの犠牲を基に、今の私達日系の自由な生活があり、日本にいる私はそれに恥じない努力や社会への還元をする必要があると感じます。目の前の事で手一杯になりそうな時もありますが、「なんとかなる」という精神も忘れずにいたいです。そして、生命現象のしくみの解明・疾患の克服に寄与し、新たな知的価値を創出できる国際的リーダーを目指していきたいです。また、今までの自分の経験や学びを生かして、日本とインドネシアとの架け橋を少しずつ伸ばしていければと思います。

山崎 誠さん

横浜国立大学大学院 理工学府 博士課程後期1年

ルーツ：中国

私は中国帰国者 3世で、長野県で育ちました。幼少時は、国籍が周囲と異なり、経済的に困窮していたことに引け目を感じ、この状況を脱するために一生懸命勉強しました。その甲斐あって、なんとか国立大学に入学できましたが、奨学金の多くは日本人対象で応募できず、貸与型の奨学金やアルバイトで生活費を賄っていました。



転機になったのは3年生の時です。大学の掲示板で「坪井基金」の募集を見つけ、一瞬「これ、僕のための奨学金?」と思いました。その直後「私と同じように海外にルーツを持つ学生が一定数いるのか」と驚きました。

現在は博士課程で生体医用材料の開発に取り組んでいます。実は、これまでの研究は高分子化学、組織工学、計算化学など多岐に渡り、分野が一貫していません。特に去年は、九州の研究所で全く専門外のバイオセンサの研究をしていました。私を引き受けてくれた先生は非常に厳しく、私の研究姿勢に対して多くの叱咤激励をして下さり、自身の未熟さを痛感する苦しい毎日が続きました。「君は他の研究者と比べて何の武器があるんだ?」と聞かれましたが、すぐに回答できず、研究者としての自身の強みを深く考える機会となりました。

大学へ戻ってから、私の強みは、異なる分野の知識と技術を併せ持ち、中国にルーツを持つという学際的・国際的な側面ではないかと考えるようになりました。自分の出生に悩んだ時期もありましたが、グローバル化の進む世界で、海外にルーツを持つことが大きな強みになると実感しています。その強みを生かすために、博士号取得後は製薬企業で新薬の開発に携わり、人々の健康で豊かな暮らしに貢献したいと考えています。その夢を叶えることで、これまで支えて下さった方々に恩返ししたい、そして過去の自分と同じ状況で困っている学生に手を差し伸べ、後押しできる存在になりたい、と思っています。

「一人も取り残さない」ために

「拠点型+オンライン型+アウトリーチ型」学習支援を組み合わせる

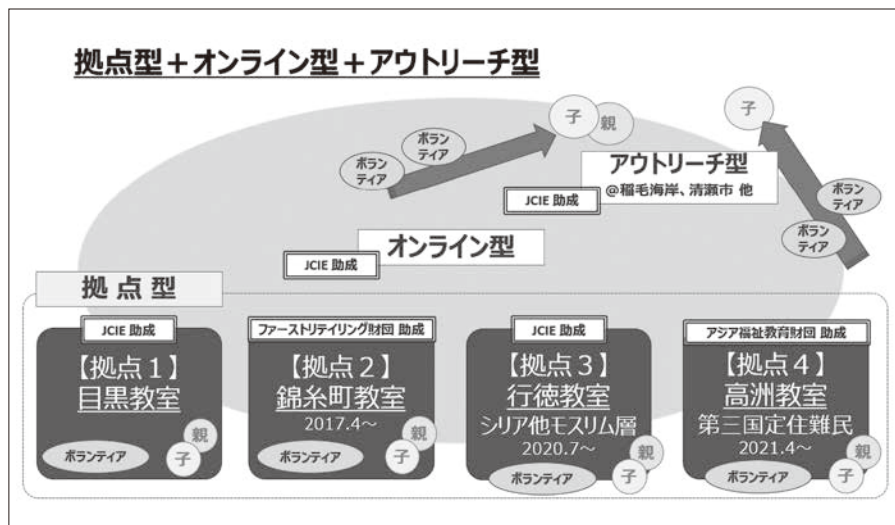
さぼうと21は、現在、(公財)日本国際交流センター(JCIE)「外国ルーツ青少年未来創造事業」の助成をいただき、「一人も取り残さない」ための包括的学習支援事業—拠点型、オンライン型、アウトリーチ型学習支援を組み合わせる—を実施しています。2020年度から2022年度までの3か年にわたって行われるこの事業に応募を決めたのは、文字通り、

「一人も取り残さない」を学習支援事業の目標として改めて掲げ、事業を進めていきたいと考えたからです。

ここ数年、目黒、錦糸町の教室での学習支援、日本語支援の活動は大勢のボランティアの方々に支えられて順調に展開しています。しかし、その一方で、「勉強したい」というお声がさぼうと21まで届いても、学習希望の方が遠方にお住まいだったり、学習時間の調整ができなかったり、学習機会の提供ができないまま、ただ時間だけが過ぎてしまったということも何度もありました。どこかお近くの教室につなぎたいとも思うのですが、そもそもそのような教室が存在しなかったり、やっとみつけた教室に十分な数の支援者がいなかったりで、講じる手立てが何もみつけれないままに、結果的に支援見送り・・・団体としてもいつまでも悔いの残る、苦い経験です。

そうした長年の課題への解決策として実施に踏み切ったのが、学習希望者のもとに、その近くにお住まいのボランティアの方が出向いていく「アウトリーチ型」の学習支援と、「オンライン型」の学習支援です。それらに、従来の対面を基本とする「拠点型」の学習支援も加えた3つのタイプの学習支援を、学習希望者のニーズや状況に応じて柔軟に組み合わせることで、一人も取り残すことのない、盤石な学習支援の体制となることを期待しています。

コロナ禍ではありますが、昨年から、学習を強く希望する千葉市在住の中高生4名のもとに、同じく千葉市在住の大学生の皆さんが、毎週土曜日、学習支援に出向いてくださっています。



武内 遼さん (大学生ボランティア)

「学習者にとって自分の居場所になるような温かい教室にできるよう活動に取り組んでいます。今後も学習者一人一人と関わる時間を大切に、共に学び共に成長していけるよう精一杯頑張ります。」

また、2020年7月、その必要性和緊急性が高いと判断した市川市行徳では、ムスリムの小中高生を対象に、新しい拠点(教室)をスタートさせました。

山本 佳奈さん (行徳教室コーディネーター／Facebook より)

「明確な正解がなく、日々迷い続ける七転び八起きの毎日ですが、今後も学習者たちの成長に寄り添い、彼らと「一緒にいる」ということに全力で向き合いたいと考えています。」

これからの事業展開をぜひ温かくお見守りください!

社会福祉法人さぽうと21は、2021年6月14日に開かれた評議員会・理事会で、新たな理事長に高橋敬子（前事務局長）、事務局長に堀江良彰（認定NPO法人難民を助ける会（AAR JAPAN）理事長）を選出いたしました。前理事長の吹浦忠正は会長となります。この場をお借りして、皆さまにご挨拶申し上げます。

社会福祉法人さぽうと21の理事長を「退くべし」と思いつつ、とうとう傘寿を迎えてしまいました。幸い運転免許証更新のための認知機能検査もあっさりクリアしたとはいえ、おそらくみなさまにはさぞ、ご迷惑をおかけしてきたに違いないと、お礼の前にお詫びせざるを得ません。

難民を助ける会には1979年の創立前から関わり、今も特別顧問として毎月の常任理事会に出席していますから、42年余関わってきました。1992年に、その活動を内外に分け、「さぽうと21」を創設しましたが、互いに補完し合い、活発に活動しています。共に「日本人の善意を形にして支援すること」を継続してきました。

以前は、「NGO（非政府組織）って反政府機関ではないのか」「落ちこぼれか、ほかに出来ないことがない連中の集まりだろう」といった声もありました。私のような者がやっているのでは無理ない批判かもしれないと、仲間とともに努力してきたつもりです。おかげで「さぽうと21」の関係者から法務省の難民審査参与員を多数輩出するようになりました。いずれも誠意をもって、「審尋」という面接を行っているのです。しかし、迫害や紛争により故郷を追われ、来日する難民申請者が増える一方で、安定と豊かさを求めて、アジア各国から日本にやってくる、働くことを目的とした申請者も膨大な数に上っています。その人たちが日本社会で活躍するためにはどうしたらよいか、21世紀の大きな課題ではないでしょうか。さぽうと21はこれまでの活動実績に加え、こうした分野でさらに社会への働きかけをしていけるNGOになってほしいと期待しています。長い間、ご協力くださりありがとうございました。幸い、後任の高橋敬子理事長とは半世紀以上に及ぶ仲間です。

私同様、ご支援くださいますようお願い申し上げます。



新理事長に就任した高橋は、1992年からAAR Japanでの活動を始め、2007年よりさぽうと21の事務局長を務めてきました。新事務局長の堀江は、2005年よりAAR Japanの事務局長として、海外の難民支援や人道支援、障がい者支援、また日本国内の災害支援等に携わり、今年度からは同団体の理事長を務めております。

新体制においても、「困ったときはお互いさま」の団体精神を心に刻み、難民等定住外国人の支援に努め、事業を展開してまいります。皆さまのあたたかなご支援の程をどうぞよろしくお願い申し上げます。



Newsletter

Support21 Social Welfare Foundation

Vol.72 2021.12

社会福祉法人 さぽうと21

理事長 高橋 敬子

社会福祉法人さぽうと21は…

認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan）を母体に、その国内事業を受け継ぎ、社会福祉法人として1992年に設立されました。

日本で生活する難民やその家族、定住外国人などの相談に乗り、学業継続のための就学支援や学習支援など、自立を後押しする活動を行っております。また、日本人の学生には、pp奨学金を2017年度から実施しています。

私たちの活動を応援してくださる方を求めています！

■会 員：法人会費50,000円／個人会費5,000円

■ご寄付：随時受付

■マンスリーサポーター：随時受付

詳しくはこちら➡



会費・ご寄付とも税法上の優遇措置が受けられます

◆会費・寄付のご送金口座◆

ゆうちょ銀行	振替口座：00180-7-25470 加入者名：社会福祉法人 さぽうと21 ※通信欄に会費または寄付とご明記ください
三井住友銀行	目黒支店(普) 851872 名義：社会福祉法人 さぽうと21にじゅういち
みずほ銀行	目黒支店(普) 1180279 名義：社会福祉法人 さぽうと21にじゅういち
三菱UFJ銀行	目黒駅前支店(普) 1390060 名義：社会福祉法人 さぽうと21にじゅういち ※銀行振込み後は事務局までご一報ください

お問い合わせ

社会福祉法人 さぽうと21

住所：

〒141-0021
東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル6階

TEL：

03-5449-1331

FAX：

03-5449-1332

E-mail：

info@support21.or.jp

URL：

http://www.support21.or.jp

